

埼玉育ちのグローバル人

大草原の小さな家…に暮らす、元留学生

第3回 「人間として成長させてくれた」
留学生時代



SAITAMA

埼玉県マスコット「コハトン」

平成24年度「埼玉発世界行き」奨学生

カーン友子 さん



3回目は、私のアメリカ生活の原点である留学生時代についてお話ししようと思います。

日本ではあまり知られていないであろうウィスコンシン大学マディソン校。実は「パブリック・アイビー」の中の一校で、全米一位にランクされている分野もいくつもあります。私が勉強したカリキュラム&指導学部もその一つで、私はそこの世界言語教育（英語教育や日本語教育）プログラムの卒業生です。博士課程の最初の二年間は授業を履修し、次の一年は研究計画の作成と許可申請、その翌年

は研究の要であるデータ収集、最後の二年は博士論文の執筆と就職活動に費やし、トータル六年で修了しました。ちなみに六年というのは、私の学部ではちょうど平均にあたります。八年以上かける人もいれば、三年で終わらせて卒業していく人もいました。

博士課程在籍中は、授業を取ったり研究したりする傍ら、色々な仕事を体験しました。大学付属の研究センターでプロジェクト・アシスタントとしてアメリカの英語教育に関する文献探しに没頭したこともありますし、高校三年生向けのサマースクールで二ヶ月間国際学を教えたこともありました。



ウィスコンシン大学マディソン校マスコット

「Bucky Badger」

私にとって最大のターニングポイントになったのは、間違いなく、初めて日本語を教えることになった2014年の秋学期（8月～12月）です。それまで日本語を教えたことのなかった私でしたが、教える機会をいただき、ティーチング・アシスタントとして毎日学生の前に立つようになりました。これをお読みになっている皆さんは、日本語（もしくはあなたの母国語）を教室で学生に教えるという経験をしたことがありますか？生まれた時から慣れ親しんできた日本語。いざ教えるとなると、最初は思っていたより難しく、とても苦労しました。しかし、この偶然巡ってきた日本語を教える仕事のおかげで、私は日本語を教えることの楽しさに気づかされました。そして、前回のエッセーでも書いた

ように、後々私は大学教授として日本語を教えることとなるのです。

博士論文の研究では、アメリカの大学で勉強する日本人留学生の、言語使用、社会的交流、アイデンティティという3つの関わり方を研究しました。留学生、特に東アジア系の学生は、留学先で現地の人々に一括りで捉えられがちな部分があります。しかし、研究でわかったことは、日本人であるというアイデンティティや日本文化を積極的に自己定義に使う学生は少なく、逆に、「日本人であるということ」を抜きにして、一人の人間として、周りの人と関わり、認められたい」と願う学生が多いということです。日本人としてではなく、もっと大きな、国境を超えた枠組みに自分の場所を見つけないという考え方は、コスモポリタニズムにも当てはまる部分があります。また、今回の研究において顕著だったのは、留学を「言語習得」、「友情の輪を広げる」、「学問的な知識を身につける」という目的で捉えるのではなく、「人間として成長する機会」として試している学生の多さでした。留学を経験する多くの学生が、十代最後から二十代です。この期間にかけての人間発達と異文化理解や言語習得がどのように相互作用するのか、あまり研究がなされていません。今後機会があったら、留学と人間発達についてさらに研究を進めてみたいと考えています。



博士課程時代の親友たち

博士課程時代の思い出といえば、他に友人たちのことが頭に浮かびます。私のプログラムが「世界言語教育」だったこともあり、学生も国際色豊かで、アメリカ人よりも留学生の方が多い環境でした。ルームメートの出身地はトルコとインド。アパートの隣近所はロシア、韓国、イラン人の留学生。授業・研究・就活を通して支え合ってきた親友たちは中国やウズベキスタン出身。ある時ふと友人の出身国の数を数えてみたら、ざっと50を越えていて驚いたものです。ずっと日本で暮らしていたら、ここまで幅の広い交友関係には恵まれなかったと思います。ちなみに、遡ること今から10年前、修士課程ではハーバード大学の教育学大学院で人間発達と心理学を勉強しました。授業のレベルの高さや、課題が終わらずに睡眠時間4、5時間で毎日必死だったこともいい思い出ですが（笑）、それ以外に今でも鮮やかに蘇るのは、やはり仲間たちの顔と声です。勉強がメインの留學生活ですが、教室で得た知識と同じくらい価値があるのは、間違いなくそこで得られる仲間との繋がりだと思います。



留學生活を送ったマディソンの街

こうしてアメリカでの留学生活・教師生活・家庭生活を振り返ってみると、最初は新しく苦勞していたことも、いつしか普通になり、そして「自分にとっての大切な一部」になってきたことを思い知らされます。一度視野が広がった今となつては、元の自分-小さな世界に住んでいた自分-には、戻ることにはできないのです。たくさんのことを見て、聞いて、感じられるようになった今の自分だからこそ出来る社会貢献・恩返しとは何だろうか、と考えながら、これからも生きていきたいものです。